広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

女子短期大学保育学科１年生における楽典学習に対するレディネス

大 西 潤 一
（鈴峯女子短期大学）

問題の所在と目的

保育者にとって，ピアノで弾き歌いができる能力は非常に重要なものである。ピアノの弾き歌いは，子どもたちの歌声をリードし，子どもたちに歌うことや音楽の楽しさを伝えるものであり，教育的には，就学前教育として子どもたちに音楽の基礎的能力を獲得させるものでもある。弾き歌いの能力は，一つには楽譜を読んで音にする力，すなわちソルフェージュ能力に支えられている。そして楽譜を読むためには楽典（音楽理論）の基礎的な知識が不可欠である。

近年の少子化の流れの中で，受験生確保のために保育者養成校の受験科目からピアノ実技が外される傾向にある。その結果，1度もピアノに触ったことがない者が養成校に入学してくるということが現実に生じている。筆者はある短期大学において，ピアノおよび基本的な楽典，ソルフェージュを教えているが，特に学生の楽典に対する理解度が低いことに悩まされてきた。もちろん，私的な個人レッスンや部活動（吹奏楽，合唱等）によって，楽典の知識をある程度獲得している者も少なくないが，一方で，学校の授業を除くと全く音楽学習の経験がない者も一部に見られた。また，ある程度獲得している者でも，その水準はまちまちであることが予想される。

わが国における大学，短期大学等の保育者養成校における入学時の楽典知識についての先行研究としては，菊池（1978, 1979）や小杉（2000）がある。菊池（1978, 1979）は，東京女子体育大学体育学科，同短期大学児童教育学科の1年生を対象として，ソルフェージュの授業の最初の時間において楽典テストを行っている。テストは1977年と1978年の2年間にわたって行われており，問題数は3問から4問（それぞれの問題ごとに枝問がある）で，短い旋律に階名を書かせる，指定した音を5線に書かせる，などの問題から構成されている。菊池は，調査のまとめとして「音名は20%ほどしか理解されていない／階名は70%以上が理解している／音符は70%余りが理解している（菊池，1979, p.167）」と記している。階名の正答率が70%以上というのは今日の音楽教育現場の実態からして驚きであるが，これは菊池の調査対象者が，昭和33年または昭和43年告示の学習指導要領（後に詰め込み主義であるとの批判を受けた）によって教育を受けたためであろう。

また，小杉（2000）は，一宮女子短期大学幼児教育学科の新入生を対象として，楽典基礎知識調査を行っている。問題数は6問で，それぞれに枝問がある。内容は音名の読みとり，音符や休符の読みなど基礎的なものであった。調査の結果，「入学前の段階で既に楽典の基礎的な事項を大体理解していると見なして良いと思われる学生は、第一部で43名（30%），第三部で4名（8%）であった（小杉，2000, p.217）」と記している（なお，一宮女子短期大学幼児教育学科では，2年制を第一部，3年生を第三部と称している）。

上記2研究は，幼児教育学科（以下保育者養成校）等に進学した者の楽典の基礎知識について，ある程度その実態を明らかにしている。どちらの研究も，調査項目にもよるがいずれも楽典の基礎知識が不足していることを示している。しかしながら，問題数が少なく，また問題が平易すぎるということを指摘できる。

そこで本論文では，筆者の勤務校である某短期大学において，1年生を対象としてソルフェージュと楽典を教える科目（当該校での科目名は「音楽リテラシーⅠ」）の診断的評価として実施している「楽典基礎テスト」の正答率を分析する。そして女子短期大学保育学科1年生における楽典学習に対するレディネスについて考察し，今後の指導方針に対する示唆を得ることを目的とする。

方　法

【調査時期】

2008年4月

【調査対象者】

某女子短期大学保育学科における1年生74名のうち，調査当日出席していた71名を調査対象者とした。

【テスト内容】

楽典における基礎的能力を問う設問20問を作成した。設問の領域は，音価，音名，音程，和音，調性，およびその他の基礎的設問から構成されていた。設問はすべて3択式であった。設問は，基本的に易から難の順に配列した。

結果および考察

【設問ごとの結果と考察】

全設問を通した平均正答率（以下単に平均正答率とする）は70.1%（*SD*：13.8%）。最高正答率は95.0%，最低正答率は35.0%であった。

以下，各設問について正答率を示し，考察を加えていく。

①𝄢の名称は（1. ヘ音記号　2. ト音記号　3. ハ音記号）である。

正解：1　正答率：93.0%

音部記号の名称を問う設問である。この設問は正答率が高かった。しかし，誤った者が5名（5.6%）いたことは重視しなければならない。ちなみに誤った5名中4名は「ト音記号」と答えていた。

②𝅗𝅥は♪の（1. 2倍　2. 4倍　3. 8倍）の長さである。

正解：2　正答率：60.6%

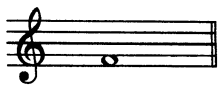
音価の比を問う設問である。平均正答率よりも約10ポイント下回っている。「2倍」と解答した者が36.6%もいた。2分音符を4分音符と誤認したためかもしれない。

③𝅗𝅥.は♩の（1. 1.5倍　2. 2.5倍　3. 3.5倍）の長さである。

正解：1　正答率：85.9%

付点による音価の変化を問う設問である。平均正答率よりも約16ポイント上回っており，理解度が高い設問であった。「2.5倍」と解答した者が9.9%いた。

④ 次の音の高さは（1. ミ　2. ファ　3. ソ）である。

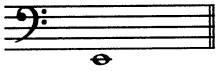


正解：2　正答率：98.6%

ト音譜表における音高の読み取りを問う設問である。これはきわめて正答率の高い設問であった。加線を伴わないト音譜表における音高の読み取り方については，おおむね理解していることと思われる。1名「ソ」と答えた者がいたが，当該学生の他の設問の正答率を検討すると，当該学生が特に低得点であると

は見られなかったので，書き間違いではないかと思われる。

⑤ 次の音の高さは（1. ド　2. レ　3. ミ）である。



正解：3　正答率：67.6%

ヘ音譜表における音高の読み取りを問う設問である。ト音譜表の場合と異なり，正答率が平均正答率よりも低くなっている。興味深いことに31.0%の者が「ド」と解答している。すなわち音部記号に関わらず下第1線における音はドであると習慣づけられているようである。仮にそうであるならば由々しきことであり，指導の際は音部記号の意味と，音部記号によって各線，間の音高が違ってくることを十分理解させるようにするべきである。

⑥ ♯は音の高さを（1. 半音上げる　2. 半音下げる　3. 元の高さに戻す）記号である。

正解：1　正答率：95.8%

変化記号の意味を問う設問である。正答率がきわめて高い。3名の者が「半音下げる」と解答している。変化記号については一応理解していると思われる。

⑦ 次の1. ～3. から，音の強さを弱い順に並べたものを選びなさい。

1. ***ff f mf mp p pp***　2. ***pp p mf mp f ff***　3. ***pp p mp mf f ff***

正解：3　正答率：84.5%

強弱記号の意味を問う設問である。正答率は平均正答率よりも約14ポイント高い。1. と解答したものが9.9%いた。これは単純に弱い順を強い順と勘違いしたものであろう。

⑧ 音符に＞が付いている場合，その音符は（1. 長く伸ばして　2. 強く　3. 弱く）演奏する。

正解：2　正答率：56.3%

アクセントの意味を問う設問である。正答率は平均正答率よりも約14ポイント低い。31.0%の者が「弱く」と解答している。

⑨ 音符の上か下に・が付いている場合，その音符は（1. 強く　2. 長く伸ばして　3. 短く切って）演奏する。

正解：3　正答率：91.5%

スタッカートの意味を問う設問である。アクセント記号とは対照的に，正答率は非常に高い。7.0%の者が反対に「長く伸ばして」と解答している。

⑩ 異なる高さの複数の音符が ‿ でつながれている場合，それらの音符は（1. だんだん強く　2. 正解：3　だんだん弱く　3. なめらかにつないで）演奏する。

正解：3　正答率：98.6%

スラーの意味を問う設問である。正答率はきわめて高く，④とともに全設問中正答率がもっとも高い。特にこの記号を学習していない者でも，直観的に意味がわかるためであろう。

⑪♩‿♩と同じ長さの音符は（1. 𝅗𝅥　2. 𝅗𝅥　3. ♪）である。

正解：2　正答率：78.9%

タイによる音符の連結について問う設問である。正答率は平均正答率よりも約9ポイント上回っている。14.1%の者が3と解答している。音符をつなぎ合わせるような形状の記号で，直観的に意味が把握できそうに思えるが，この記号に関しては学習によってその意味を理解しなければならないようである。

⑫ 全音は半音（1. 2つ分　2. 3つ分　3. 4つ分）の幅である。

正解：1　正答率：62.0%

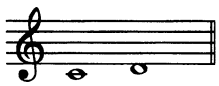
全音と半音との関係を問う設問である。正答率は平均正答率よりも8ポイント下回っている。31.0%の者が「4つ分」と解答している。これでは音程や和音の学習に多大な支障を生じさせると思われる。この項目は重点的に指導する必要があると思われる。

⑬ ドとひとつ上のドとの間は（1. 長3度　2. 完全5度　3. 1オクターブ）離れている。

正解：3　正答率：88.7%

音程に関する設問(1)である。正答率は平均正答率よりもおよそ18ポイント上回っており，理解度は高いと思われる。

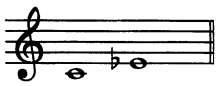
⑭ 次の音程は（1. 長2度　2. 短2度　3. 増2度）である。



正解：1　正答率：53.5%

音程に関する設問(2)である。もっとも基本的な音程の1つである長2度を問うたものであるが，半数強の者しか正答していない。28.2%が「短2度」，15.5%が「増2度」と解答している。

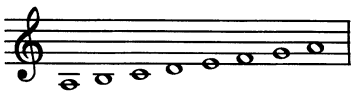
⑮ 次の音程は（1. 長3度　2. 短3度　3. 減3度）である。



正解：2　正答率：45.1%

音程に関する設問(3)である。これも，もっとも基本的な音程の1つである短3度を問うたものであるが，過半数の者が正答できていない。40.8%が「減3度」，11.3%が「長3度」と解答している。

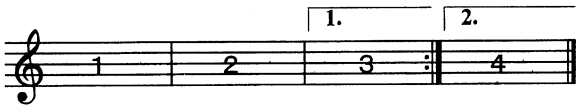
⑯ 次の音階の名称は，（1. 琉球音階　2. 長音階　3. 短音階）である。



正解：3　正答率：36.6%

音階の名称について問う設問である。正答率はかなり低く，平均正答率よりも約34ポイント低い。36.6%が「長音階」，22.5%が「琉球音階」と解答している。

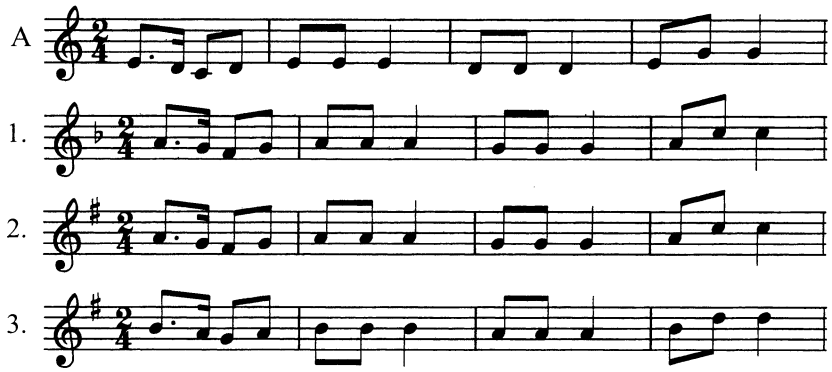
⑰ 次の楽譜の演奏順は，（1. 1-2-3-4　2. 1-2-3-1-2-3-4　3. 1-2-3-1-2-4）である。



正解：3　正答率：84.5%

リピート記号による演奏順を問う設問である。正答率は平均正答率よりも約 14 ポイント上回っている。いわゆる「1 括弧」,「2 括弧」という単純な演奏順であったために，高い正答率となったものと思われる。ダ・カーポや to Coda などが入ってくると，正答率は大幅に下降するかもしれない。12.7%が 2 と解答している。

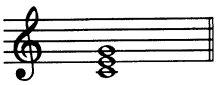
⑱ 次の楽譜Aは「メリーさんのひつじ」の冒頭です。正しくへ長調に移調したものを選びなさい。



正解：1　正答率：28.2%

移調に関する設問である。問題文に「へ長調に移調」と書いてあるのだから，調号の♭を見れば旋律を検討しなくても正解できる設問である。にもかかわらず正答率が 2 割台である。もっとも多かった解答は 2 で，43.7%の者が解答している。また，22.5%の者が 3 と解答している。

⑲ 次の和音は（1. 減 3 和音　2. 短 3 和音　3. 長 3 和音）である。



正解：3　正答率：67.6%

和音の種類を問う設問である。平均正答率には届かなかったが，それに近いところまで行っている。21.1%の者が「短 3 和音」と解答している。

⑳ 次の和音のコードネームは（1. F　2. Gm　3. C 7）である。

正解：1　正答率：25.4%

コードネームの名称を問う設問である。この設問は全設問中もっとも正答率が低かった設問である。

39.4%の者が「Gm」，31.0%の者が「C7」と解答している。このように正答率が低かった理由としては，譜表が低音部譜表であったことと，コードネームそのものを知らない者が多数いたことが考えられる。

【結果の整理】

以上検討してきた結果を，正答率が平均正答率を上回っている設問と，下回っている設問とに分け，分析する。

(1) 平均正答率を上回っている設問（正答率の高い順）

④98.6%　ト音譜表における音高の読み取り
⑩98.6%　スラーの意味
⑥95.8%　変化記号（シャープ）の意味
①93.0%　ヘ音記号の名称
⑨91.5%　スタッカートの意味
⑬88.7%　音程に関する設問(1)：ドとひとつ上のドとの間
③85.9%　付点による音価の変化
⑰84.5%　リピート記号による演奏順
⑦84.5%　強弱記号の意味
⑪78.9%　タイによる音符の連結

(2) 平均正答率を下回っている設問（正答率の低い順）

⑳25.4%　ヘ音譜表におけるコードネームの名称
⑱28.2%　移調
⑯36.6%　音階の名称
⑮45.1%　音程に関する設問(3)：短 3 度
⑭53.5%　音程に関する設問(2)：長 2 度
⑧56.3%　アクセントの意味
②60.6%　音価の比
⑫62.0%　全音と半音との関係
⑤67.6%　ヘ音譜表における音高の読み取り
⑲67.6%　和音の種類

まず，正答率が平均正答率を上回っている設問について検討する。共通点として挙げられるのは，「④ト音譜表における音高の読み取り」や「⑩スラーの意味」に代表されるように，学習指導要領に示されている小学校レベルの音楽の知識は一応獲得されているということである。

次に正答率が平均正答率を下回っている設問について検討する。共通点として挙げられるのは，「⑳ヘ音譜表におけるコードネームの名称」や「⑱移調」のような，単に演奏するための知識を越えた，音楽理論の領域に踏み込んだ知識は得ていないということである。特に，ヘ音譜表における音高の読み取り，全音と半音の関係，音程や音階，調性や移調といった重要な概念が抜け落ちており，学生に指導する際，それらの概念をわかりやすく指導する必要があると思われる。

【音楽経験別の結果と考察】

以下，高校で音楽の授業を選択していたか否か，また，部活動，個人レッスン等課外での音楽経験があるか否に基づいて，平均正答率を分析する。

(1) 高校で音楽の授業を選択していたか否か

高校で音楽の授業を選択していた者（以下音楽選択者）は，データクリーニング後の調査対象者 62 名中 38 名（61.3%），選択していなかった者（以下非音楽選択者）は 24 名（38.7%）であった。平均正答率は，音楽選択者の場合 71.6%（*SD*: 11.9%），非選択者の場合 67.3%（*SD*: 16.3%）であった。

音楽を選択していたか否かによって，平均正答率が異なるかどうかについて，t 検定を行った。その結果，$t(60)= .24$ で，音楽選択者と非選択者との間に平均正答率の有意差は認められなかった（両側検定）。

(2) 課外での音楽経験があるか否か

音楽経験がある者は62名中27名，ない者は35名であった。平均正答率はそれぞれ74.3%（*SD*: 13.2%），66.6%（*SD*: 13.5%）であった。

課外での音楽経験があるか否かに基づいて，(1)と同様のt検定を行った。その結果，$t(60)=2.20$，$p<.05$で，経験のある者の方がない者よりも平均正答率が高いことが明らかとなった（両側検定）。

これらの知見を整理すると，高校で音楽を選択していたかどうかということと，楽典基礎テストの成績との間にはあまり関係がなく，課外活動（特にピアノや吹奏楽）との間に関連があることが認められた。なお，課外で音楽活動を行っている者は，同時に高校でも音楽の授業を選択している傾向が強いので，純粋に音楽の授業のみ，あるいは純粋に課外活動のみの影響を考慮することは困難である。

結　論

以上，簡単ではあるが，楽典基礎テストの各設問への反応の傾向と，音楽経験と楽典基礎テストの成績との関連について検討してきた。では，某女子短期大学のようなレベルの大学における楽典学習に対するレディネスとは，どういうものであろうか。

筆者は先に，正答率が平均正答率を上回っている設問について，学習指導要領に示されている小学校レベルの音楽の知識は一応獲得されている，と述べた。従って，一応はそれが楽典学習に対するレディネスということになる。しかしながら，ヘ音譜表における音高の読み取りのように，基礎的な設問でありながら正答率が平均正答率に及ばなかった例もある。従って，指導に際しては，まず小学校レベルの学習内容の中から比較的理解が困難であるようなもの（ヘ音譜表における音高の読み取りなど）を徹底して復習させ，その上で段階的に音程や和音，調性などを教授していくことが望ましいと筆者は考える。

もちろん，中には楽譜を読むことがまったく出来ない学生も入学してきていると思われる。そのような学生には，個別指導によって学習を援助していく必要がある。某女子短期大学保育学科のカリキュラムには，当然ピアノの授業があり，習熟度別編成によってピアノの実技を教授している。そういう場において，楽典を基礎の基礎から学習していくことは可能であり，現にそれは行われている。

本論文は，特定の1女子短期大学保育学科1年生を対象として楽典学習に対するレディネスを検討してきた。この結果がどの程度一般化できるかどうかははっきりしないが，少なくともピアノ実技を入学試験で課していないような（短期）大学については一般化可能ではないかと考えている。つまり，小学校レベルの楽典の知識はおおむね獲得しているということである。

今後は，小学校教員養成課程の1年生おける楽典学習のためのレディネスなど，幅を広げた調査を行って行きたい。

文　献

菊本哲也 (1978). 新入学生の楽典テストに関する一考察. 藤村学園東京女子体育大学紀要, 13, 94-109.

菊本哲也 (1979). 新入学生の楽典テストに関する一考察Ⅱ：まとめ. 藤村学園東京女子体育大学紀要, 14, 162-168.

小杉裕子 (2000). 平成12年度幼児教育学科新入生の楽典基礎知識調査. 一宮女子短期大学研究報告, 39, 217-226.